

## *Prufrock and Other Observations* における語り手たちの視点

### The Speakers' Viewpoints in *Prufrock and Other Observations*

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成23年9月30日受理)

#### はじめに

1917年に、T. S. Eliot (1888-1965) にとって詩人として記念すべき第一詩集 *Prufrock and Other Observations* が刊行された。そこには12編の詩が収められている (Gallup 23)。しかし、これらの詩の構成は、必ずしも創作の順に記載されないで、第一詩集の表題が示すように “The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910-11) を冒頭にして成り立っている。

こうした構成による詩の記載順から判断すると、第一詩集は冒頭の詩の語り手 J. アルフレッド・プルーフロックの言動に見られる表現内容を展開させているように思われる。その表現内容は、都会生活の異なる様相 (社交界, 場末) と、男女間の実らぬ愛である。

本稿は、冒頭の詩でのプルーフロックの言動を考察した後、彼の示唆を参考にして他の詩の描写を検討する。その際に、言及する詩の創作年代の背景にも注意を払うことにする。ここでは、そうした検討や注意の結果から明らかになる第一詩集の特徴を探るために、語り手たちの視点に焦点を当てたい。

#### 1

まず、冒頭を飾る “The Love Song of J. Alfred Prufrock” から論を進めることにする。この詩の書き出しは次の通りである。

Let us go then, you and I,  
When the evening is spread out against the sky  
Like a patient etherised upon a table;  
Let us go, through certain half-deserted streets,  
The muttering retreats  
Of restless nights in one-night cheap hotels  
And sawdust restaurants with oyster-shells: (13)<sup>1</sup>

“I” は、この詩の表題からわかるように、プルーフロックである。相手の “you” と何かを話した後、彼は、夕暮れが空に広がるように、思いも高じて出かける。その思いの高揚は、手術台で麻酔をかけられた患者の意識が薄れていく状態で表されている。彼が目的地へ行く途中の場所は、人がまばらな通りである。また、彼がそこで見かけるのは、落ち着かない夜のささやき声が聞こえる一晩泊まりの安ホテル、カキ殻の散らばったオガ屑の料理屋である。

ブルーロックと“you”の行く先が次のように示されている。

In the room the women come and go  
Talking of Michelangelo. (13)

部屋では、婦人たちがイタリアルネッサンス期の彫刻家・画家・建築家のミケランジェロ（1475-1564）を話題にしている。二人の目的は、上の詩行から察して、彼女たちに近づくことである。

しかしブルーロックは、時間や自分の身体（禿げた頭、細くなった手足）をしきりに気にかけて、行動を躊躇する。その理由が次のように語られている。

For I have known them all already, known them all —  
Have known the evenings, mornings, afternoons,  
I have measured out my life with coffee spoons; (14)

And I have known the arms a already, known them —  
Arms that are braceleted and white and bare  
(But in the lamplight, downed light brown hair!) (15)

彼は、コーヒーのスプーンで計ったような決まりきったイメージで、飽き飽きした人生を自己風刺的に吐露する。部屋は、霧や煙が立ち込める外界から孤立した状態である（Brooks and Warren 391）。一方で、彼はそうした部屋の孤立状態にいる婦人たちの姿を鋭く観察する。話題が芸術に及んで一見華やかそうな社交界の雰囲気であるが、彼女たちの人生は、実際には、自分の人生と同じように日々の事柄（夕方、朝、午後など）も空しく繰り返されていることを示唆している。その上、腕輪の誇示に不釣り合いな薄茶色のうぶ毛の発見から、彼女たちの心の醜さまでも、彼は見通している。

その後ブルーロックは、求愛を妙にためらいながらも、その求愛を想定した場合の次のような台詞を思い浮かべる。

Shall I say, I have gone at dusk through narrow streets  
And watched the smoke that rises from the pipes  
Of lonely men in shirt-sleeves, leaning out of windows? ... (15)

彼が考えるのは、夕暮れ時の狭い通りでワイシャツ姿となり、窓から身を乗り出した寂しい男たちのパイプの煙である。この夕暮れ時の様子は、場末の視覚的な描写であるばかりではなく、彼の心象風景でもある。そのことは、彼が目的地へ行く途中で見かけた場所についても言えよう。彼は、求愛を妙に後退させながら、その求愛を実行した場合もイメージする複雑な気持ちを表している。

結局、この詩は次のような場面で終わる。

We have lingered in the chambers of the sea  
By sea-girls wreathed with seaweed red and brown  
Till human voices wake us, and we drown. (17)

ブルーロックは、語りかける相手を意識しながら発言している。物静かな海底で海藻を花輪のように飾った海の乙女たちは、薄茶色のうぶ毛が見えるお喋りな社交界の婦人たちと対照的である。この対照はかえって、彼が彼女たちへの思いを完全に諦めているわけではないことを遠回しの形で浮き彫りにしている。また、“We” (“we”), “us” はブルーロックと彼が連れ出す相手を指すが、この相手は、最後までどういう人物かがわからずじまいなので、たとえば彼の分身<sup>2</sup>や彼に追従する一般の読者（Brooks and Warren 391, 396）であると解釈できよう。

その上、ブルーロックの溺死のイメージが示唆するのは、彼が再び恋愛をしたくなる誘惑に負けて、

“The Love Song of J. Alfred Prufrock” の冒頭の場面を繰り返すことであろう。その意味で、この詩は円環構造となっている。この構造を担う役割をするのが語り手である。彼の視点は、都会生活の二つの場面—社交界と場末—に目を向けて、両方の場面に共通した醜い様相を指摘しようとするのである。その指摘の格好の題材が男女間の不毛の愛である。

このように、複眼的な視点を持つ語り手の人物描写の手法を考えてみたい。エリオットは、アメリカのセントルイスで生まれ育っている。ブルーロックという名前は、この都市にあった店の看板から用いられている (Wyant 1-8)。この都市は、隣のイリノイ州の炭田から時々ゆっくりとやって来る濃霧でおおわれた (Smidt 3)。この現象が、社交界を取り巻く霧と煙の描写に認められる。“And I have known the eyes already, known them all—” (14) という語り手の台詞にある “the eyes” は、エリオット家を支配していた祖父 William Greenleaf Eliot (1811–1887) の「目」を暗に指しているし、母親 Charlotte Champe Eliot (1843–1929) や姉たち<sup>3</sup>の「目」にも及んでいるであろう。エリオット家は、祖父がセントルイスでキリスト教のユニテリアン派の教会を建てたり、ワシントン大学の創立に尽力したりした由緒ある家系である。そこで、エリオット家の部屋が1901–11年の詩で描かれた社交界の部屋の下敷きとなっているであろう。

晩年のエリオットは、セントルイスについて次のようなことを述懐している。

In St. Louis, my grandmother—as was very natural—wanted to live on in the house that my grandfather had built; my father, from filial piety, did not wish to leave the house that he had built only a few steps away; and so it came to be that we lived on in a neighbourhood which had become shabby to a degree approaching slumminess, after all our friends and acquaintances had moved further west. And in my childhood, before the days of motor cars, people who lived in town stayed in town. So it was, that for nine months of the year my scenery was almost exclusively urban, and a good deal of it seedily, drably urban at that. My urban imagery was that of St. Louis, upon which that of Paris and London have been superimposed. (“The Influence of Landscape upon the Poet” 421-22)

エリオット家が1年のうち9か月をセントルイスで住み続けた理由が語られている。その理由として、祖母は祖父が建てた家を離れたくなかったからであるし、父親 Henry Ware Eliot, Sr. (1843–1919) も親孝行のために、近くに建てた家を離れたくなかったからである。知人や友人が西へ引っ越し後、生家の周囲はスラムに近い状態にまでみすぼらしい姿となっていた。その姿が、子供時代のエリオットに強く焼き付いて、“The Love Song of J. Alfred Prufrock” における場末の風景の下敷きとなっている。

エリオットはこの詩の語り手を、40歳位の中年としてばかりではなく、自分自身としても描いている (“T. S. Eliot ... An Interview” 17)。前者の姿は、物事に確信がなさを力説する主人公らしくない主人公の姿である。その姿が逆に、新しいタイプの人物像を提示した新しい詩の誕生へとつながっているのである。懐疑主義者のエリオット (“To J. H. Woods,” 28 Jan. 1915, *The Letters of T. S. Eliot* 91) は、祖父が家の支えとして確立したキリスト教のユニテリアン派<sup>4</sup>の洗礼を受けたにもかかわらず、この宗派の外で育てられたと信じるようになる (“[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry” 771)。その結果、生き方を模索して苦悩する彼の言動が、狐疑逡巡する語り手の言動を介して、この詩に盛り込まれていると言える。生家の近くの退廃的な状況が、この詩に描かれた場末の原風景として用いられているのである。

エリオット家を支配していたのは、祖父の遺訓 (公共への義務, 慈善, 立派な仕事) (Pritchett 73) である。エリオットの母親は義父の遺訓を忠実に守って、子供たちを厳しく教育している。<sup>5</sup> 父親は、性的本能を忌み嫌う立場から息子を育てている (Ackroyd 45)。しかしエリオットは、ユニテリアン派を厚く信仰する両親から行動規範を強要される家庭環境の重圧となって、この宗派に反抗的となるのである (Powel 4)。こうした反抗的な姿勢が、彼の詩にうかがわれる男女間の不毛の愛に反映されている。

第一詩集は、その表題から判断できるように、“The Love Song of J. Alfred Prufrock” の語り手が観察した内容が出发点となっている。それは、都会生活の上流社会と場末の退廃的な様相、男女間の不毛の愛である。以下で、これらの事柄が他の詩の語り手たちによってどのように展開されているのかを考察してみることにする。

## 2

“Portrait of a Lady” (1910-11) は、大学に在籍する青年の語り手と中年の婦人の話し声から成り立っている。霧と煙で包まれたある年の12月の午後、青年はこの婦人を訪れる。二人の会話では、彼女は若いピアニストによるショパンを話題にして、親密な雰囲気を作り出そうとする。しかし青年は、婦人に対するかすかな欲望と、ここへ来たことの後悔の念とが入り交じった気持ちを抱く。女性は、彼の心を引きつけるために、今度は話し相手を持つことが生きがいであると熱っぽく語る。すると、これまで笑みを浮かべて余裕を見せていた青年の心に次のような変化が起こる。

— Let us take the air, in a tobacco trance,  
Admire the monuments,  
Discuss the late events,  
Correct our watches by the public clocks.  
Then sit for half an hour and drink our bocks. (19)

彼は、愛情を感じさせる彼女の話に共感しないようにする方法を考案する。それは、部屋の外の平凡な日常生活（記念碑、最近の出来事、公共の時計、僕たちの黒ビール）に頭を切り替えて、自分の心を静めることである。

ライラックの花が咲く翌年の4月、青年は婦人を再び訪問する。この花を生けた部屋で、彼女はその枝をひねりながら人生論を熱く語り、“the friendship and the sympathy” (20) を相手から得ようとする。しかし今回も彼女の話に同調しないようにするために、彼は次のようなことを考える。

I take my hat: how can I make a cowardly amends  
For what she has said to me?  
You will see me any morning in the park  
Reading the comics and the sporting page.  
Particularly I remark.  
An English countess goes upon the stage.  
A Greek was murdered at a Polish dance,  
Another bank defaulter has confessed. (20)

彼が思い浮かべるのは、婦人に対する自分の対応を振り返り、朝の公園の片隅で新聞の漫画やスポーツ欄を見ることである。その新聞内容で注目されるのは、三面記事（イギリスの伯爵夫人の舞台活動、ギリシャ人の舞踏での殺害、もう一人の銀行員の公金横領の自白）である。イギリスの伯爵夫人の舞台活動に目が留まるのは、彼が婦人をまだ忘れないで意識している証拠であり、三面記事での他の二つの出来事は、彼が彼女に対する背信行為を感じている証拠である。こうした三面記事の含みを前回の訪問での平凡な日常生活への切り替えと比べると、今回の彼の罪意識が強くなっているのがわかる。

同じ年の10月、海外留学が理由で別れの挨拶をするために、青年は婦人への三度目の訪問をするが、足取りが重く気分もすぐれない。彼女はこの海外留学を好意的に受け止めた発言をする。それは、“We must leave it now to fate. / You will write, at any rate. / Perhaps it is not too late. / I shall sit here, serving tea to friends.” (21) である。

相手の将来を見据えた穏やかな物言いをする婦人の対応に直面して、青年はかえって戸惑い、面食らってしまう。その結果、彼の頭の中で次のようなことが生じる。

And I must borrow every changing shape  
To find expression ... dance, dance  
Like a dancing bear,  
Cry like a parrot, chatter like an ape.

Let us take the air, in a tobacco trance — (21)

彼の感情が凄まじく爆発している。その爆発を表現する様態（熊の踊り，おうむの鳴き声，猿のお喋り）は，前回よりも彼の罪意識が一層強くなっていることを示唆する。婦人と別れた後も，彼は足取りが重く気分もすぐれなかったであろう。

この詩は，次のような場面で締めくくられている。

And should I have the right to smile? (21)

青年は，最初の訪問のとき婦人の部屋で笑みを浮かべていた態度を回想する。この回想から察すると，彼は海外留学をする前の経験として処理することができずに，その後も良心の呵責に苦しめられるであろう。上の1行は，このような彼の内面の苦しみを含蓄していると言える。

“Preludes” (1910-11) は，場末の四つのスケッチ（冬の夕暮れ，翌日の朝，同日の夜と翌朝，同じ翌朝の夕暮れ）を描いている。第一前奏曲では，風の強い夕立が，枯れ葉や空き地の汚れた新聞紙をくるんだり，壊れたよろい戸や煙突の頭部をたたいたりする。街角では，寂しげな辻馬車が息をはいて足を踏み鳴らす。その後，ランプの灯がともる。このような情景は，場末の空虚な人間生活の1日が終わろうとすることを暗示する。

第二前奏曲は，翌日の朝が気の抜けたビールのかすかな匂いを漂わせることを示す。その匂いは，早朝のコーヒースタンドに押しかける人々の泥足に踏みつけられたおが屑の通りからのものである。こうした描写から，人々の決まりきった倦怠な生活の始まりを推し量ることができよう。

第三前奏曲では，場末に住む一人の女性の同日の夜と翌朝の生活が表現されている。この夜，彼女はベッドで仰向けに寝て相手の男性を待つが，その際に魂を構成する薄汚いイメージが天井に映し出される。翌日に起床する際に，彼女はベッドの端に座って，カール・ペーパーを髪の毛からはずしたり，黄ばんだ足の裏を汚れた両方の掌でつかんだりする。これは，生きる歓びを見出せないでいる彼女の現実の生活を伝えている。今日も単調な味気ない生活が彼女を待ち構えているのである。

第四前奏曲の終わり近くでは，さまざまな場末のスケッチを観察した後，語り手は次のように思い浮かべる。

I am moved by fancies that are curled  
Around these images, and cling :  
The notion of some infinitely gentle  
Infinitely suffering thing. (23)

彼は，荒涼とした場末で暮らす生氣のない人々が，“thing”という画一され，物体化されたものに等しいと判断している。そこは，場末に潜む人格喪失という人間性の危機が暗に示唆されているのである。その一方で，この語を形容する“some infinitely gentle / Infinitely suffering”という表現から，場末の人々が語り手から憐憫の情を寄せられていることが読み取れるであろう。

語り手の視点が注がれる場末の人物像には，エリオットの母親にうかがわれる優生思想と生活の弱者への人間愛の影響が考えられよう。この点について検討してみたい。

1865年にオーストリアの司祭・植物学者 Gregor Johann Mendel (1822-1884) が遺伝の法則を公表するが，15年後にこの遺伝の法則がいわゆる「メンデルの法則」<sup>6</sup>として高く評価されるようになる。1907年にイギリスで彼の遺伝学に基づいて優生教育協会 (Eugenics Education Society) が創立される。この協会の目的は，「優生学の国家的重要性を広く認めさせ，この理想にのっとった親の責任感を確立すること，人類の効果的改善を念頭においた遺伝法則の知識を広めること，家庭・学校その他の場での優生学の啓蒙を行うことであった」(米本他 24)。この協会は，エリオットの生家があったセントルイスでも設立されている (Cuddy 51)。当時，社会活動を積極的に行っていた進歩的な母親が優生思想を吸収したことは想像に難くないであろう。なぜなら彼女は，息子に関して，1910-11年にフランスへ遊学することに猛反対し (“To T. S. Eliot,” 3 Apr. 1910, *Letters* 12)，1915年6月15日に精神の不安定なイギリス人 Vivienne Haigh-Wood

(1888-1947) と当地で突然に結婚したことを優生学的によくないと判断し (Cuddy 152), 母国の大学で教師になることを強く望んだからである (“To Bertrand Russell,” 23 May 1916, *Letters* 153)。彼女は、既述した義父の遺訓を忠実に守って,<sup>7</sup> 行為の善悪を教えた (Levy and Scherle 121)。そこで、この遺訓を土台にした彼女の優生思想がエリオットの心に深く植え付けられたと言えよう。

母親はまた、さまざまな分野で社会改善に精力的に努めている。たとえば、彼女は、“Humanity Club”のメンバーになって不幸な子どもたちを援助したり、貧民を救済したりしている。<sup>8</sup> 知人の Scudder は、彼女が弱者救済に愛と共感で取り組んだと証言している (“In Memoriam”)。社会的な弱者に対する母親の人間愛も、彼女と一緒に暮らしていたエリオットの心に、先の遺訓に基づく躰を通して教育されたであろう。

このように、母親の優生思想と人間愛を盛り込んだ家庭教育の影響を受けて、エリオットは “Preludes” の場末の人間社会を描いたのだと思われる。

“Rhapsody on a Windy Night” (1911) は、風の夜の 12 時から午前 4 時まで語り手の男が月明かりの場末の街をとぼと歩いて部屋に帰る様子を描いている。真夜中の 12 時、彼が明かりのついた街を通りすぎる。そのとき、街灯が彼の心を激しく揺れ動かす。1 時間半後、街灯が突然語り始め、彼の目を戸口に立つ娼婦へ向かわせる。そこでは、娼婦のドレスの裾の擦り切れや媚びたような目尻の皺から、彼はその女性のわびしい日常生活を思う。

午前 2 時半、街灯の語りによって男は街の溝にいる猫の動作に関心を寄せる。そこでは、猫が舌を出して、一片のバターを貪り食っている。この動物の動作から、彼は街の退廃的な雰囲気を感じ取る。

1 時間後、街灯は男の頭上の月を見るように言う。街灯は、女性として擬人化された月に触れて、“Her hand twists a paper rose, / That smells of dust and eau de Cologne, / She is alone / With all the old nocturnal smells / That cross and cross across her brain.” (25) と語る。この語りの内容から判断して、月は戸口に立っていた娼婦と二重写しになっている。街灯は彼に、彼女の孤独な存在を改めて知らせようとするのである。

午前 4 時、街灯は自分の部屋に帰った男に、“sleep, prepare for life” (26) と語る。街灯は、男の心に執拗に深く入り込んで指示するので、彼の内的自我でもある。したがって、眠りを促す街灯の言葉は、場末の生気のない日常生活ばかりではなく、彼自身の孤独な生活も伝える内容となっているのである。

この詩は、上の引用文に続く次のような場面で終わっている。

The last twist of the knife. (26)

この最終行は、男が眠りにつくときに上述した自分の孤独な生活を再認識する心境であるが、同時に追体験したわれわれ読者にも安住した現実生活を再認識させようとしているのである。

男の場末を見る視点は、“Preludes” の語り手の場合と同じように、上述した母親の影響を受けたエリオットの視点のもとで書かれているのである。

プルーフロックは内省的で自意識過剰でありながら、周りの状況をしっかりと観察していた。こうした性格が “Portrait of a Lady” の語り手に受け継がれ、この語り手の視点によって社交界の様相がさらに展開されている。こうした性格はまた、“Preludes” と “Rhapsody on a Windy Night” の語り手たちにも受け継がれ、彼らの視点によって場末の姿が一層明らかにされているのである。

### 3

1915 年に発表された 5 編の詩を取り上げて、そこで描かれている人間社会の姿を調べてみよう。エリオットが 1914 年の秋にロンドンのラッセル・スクエア付近に住んでいた。同年 9 月 7 日に彼は、この場所から兄 Henry Ware Eliot, Jr. (1879-1947) に手紙を送り、その中で街路にある家の地下室の勝手口で仕事をする女中に触れている (*Letters* 59)。“Morning at the Window” は、この女性を参考にして、次のように書かれている。

They are rattling breakfast plates in basement kitchens,  
And along the trampled edges of the street

I am aware of the damp souls of housemaids  
Sprouting despondently at area gates. (27)

語り手が観察するのは、女中たちが地下室の勝手口で朝食のときに使った皿をガラガラ鳴らして洗っている。彼女たちの動きは生き生きとせず、魂はまるで湿って、菌類が発生するような状態になっている。視覚的なイメージとグロテスクなイメージを組み合わせ、彼は荒涼とした場末で希望もなく生きる人々の単調な生活を指摘している。

“The Boston Evening Transcript” は、場末の夕暮れの光景を次のように描いている。

When evening quickens faintly in the street,  
Wakening the appetites of life in some  
And to others bringing the *Boston Evening Transcript*,  
I mount the steps and ring the bell, turning  
Wearily, as one would turn to nod good-bye to la Rochefoucauld,  
If the street were time and he at the end of the street,  
And I say, ‘Cousin Harriet, here is the *Boston Evening Transcript*.’ (28)

語り手の視点が街はずれに向けられている。夕暮れになると、日中の生活から解き放たれて、夕食を食べるように何かをしたくなる欲求に駆られる人々もいれば、ポストン夕刊紙を読むのが毎日の決まった日課である人々もいる。後者の中にハリエットお婆さんがいる。語り手は、階段を上って呼び鈴を押し、夕刊紙を彼女に届ける。彼女は、今日もこうした日課を終えるであろう。街はずれで出会うかもしれないロシュフコーも、ハリエットお婆さんの場合と同じく、単調な生活を繰り返すであろう。語り手は、生活の仕方が違って、毎日を一生懸命に生きている街の人々への思いを寄せているのである。

“Aunt Helen”<sup>9</sup>では、表題のヘレン伯母さんの死にまつわる話が語り手の口から述べられている。生涯独身であった彼女の住まいはささやかで、四人の使用人の世話を受けていた。彼女の死の当日は次のようであった。

Now when she died there was silence in heaven  
And silence at the end of the street.  
The shutters were drawn and the undertaker wiped his feet—  
He was aware that this sort of thing had occurred before. (29)

ヘレン伯母さんが亡くなったとき、街はずれは天にまで届くような悲しみに包まれたことを示唆している。彼女の家のよるい戸が閉められ、葬儀屋が自分の足を洗う。この種の行為は、彼が仕事上、いつも行う葬儀のしぐさであることを自覚したものである。“Aunt Helen”も、“The Boston Evening Transcript”と同じく、場末で生きている人々の暮らしの断片を伝えている。

“Cousin Nancy”では、ニューイングランドのナンシー・エリコット (Nancy Ellicott) が次のように描かれている。

Miss Nancy Ellicott smoked  
And danced all the modern dances;  
And her aunts were not quite sure how they felt about it,  
But they knew that it was modern. (30)

彼女の振る舞い（喫煙、ダンス）は、女性の礼儀正しさを考える伯母さん連中には理解されなかったという。上の詩行から最初はおしとやかな女性に反するナンシーの行為への風刺と思われたが、4行目はその風刺が伯母さん連中の上品な社交界に潜む虚飾な世界にも向けられていると言えよう。プルーフロックの場合と同じように、ナンシーの生活と伯母さん連中の生活は共に、空虚であるという点で同じであることが暗に

指摘されているのである。

このような二つの世界の共通点を示唆する手法が“Mr. Apollinax”でも見られる。その点を探ってみたい。大学院生のエリオットは、イギリスからの客員教授であった哲学者・数学者 Bertrand Russell (1872–1970) の論理学の授業を受講した。ラッセルは、当時のエリオットを次のように述懐している。

The students, however, as I said before, were admirable. I had a post-graduate class of twelve, who used to come to tea with me once a week. One of them was Eliot, who subsequently wrote a poem about it, called ‘Mr. Appolinax’. (Russell 212)

この詩の表題と同じ名前のアポリナックス氏は、一般に、ラッセルがモデルであると言われている。そのことは、上の彼の述懐から裏付けられよう。アメリカを訪れたアポリナックス氏が、口を大きく開けて笑うと、その笑いは近くにある茶碗にこだまするほどである。この光景の一端は、エリオットがラッセルとお茶を飲みながら、談話したときを参考にしているであろう。フラッカス夫人 (Mr. Phlaccus) の屋敷やチャニング・チーター (Channing-Cheetah) 教授宅へやって来たとき、アポリナックス氏の笑いは、責任を負わない無邪気な胎児のような哄笑である。

この詩は、次のような2行で終わっている。

Of dowager Mrs. Phlaccus, and Professor and Mrs. Cheetah  
I remember a slice of lemon, and a bitten macaroon. (31)

今度は、語り手の視線がフラッカス夫人とチータ教授夫妻に注がれている。彼に記憶されるのは、一切れのレモンと噛み残されたマカロンである。この記憶は、一切れのレモンという上品な食べ方と、それとは対照的なマカロンの食べ残しを連想させる。この連想によって、上品ぶった社交界の人々の素行は、実は、アポリナックス氏の下品な素行と変わらないことが読み取れるであろう。

ここで1915年の詩を脱稿していた頃のエリオットの勉学に焦点を当ててみたい。哲学を研究する目的でハーバード大学から在外奨学金を与えられ、1914年に彼はイギリスのオックスフォード大学に入学する。しかし彼は、第一次世界大戦中の重苦しい雰囲気を感じて、大学時代の友人 Conrad Aiken (1889–1973) への手紙の中で、イギリスに住むべきか帰国すべきかなどで将来について深く悩んでいる (25 Feb. 1915, *Letters* 95-96)。そうした不安定な精神状態の彼の心を魅了したのが、1915年6月26日に突然結婚する相手となる活発なイギリス人のヴィヴィアンである。新妻がUボートの攻撃による身の危険を察知したので、エリオットは単身で帰国し、両親と再会して近況を報告する。両親から博士論文だけは書き上げるように嘆願され、彼はその願いを了承してイギリスへ帰る。

1916年4月にエリオットは“Experience and the Objects of Knowledge in the Philosophy of F. H. Bradley”<sup>10</sup>を完成させて母校のハーバード大学に郵送したが、口述試験に出席しなかったので、学位を取得できなかった。1915年1月6日に宛てたアメリカの数学者 Norbert Wiener (1894–1964) への手紙では、イギリスの観念論哲学者 F. H. Bradley (1846–1924) の重要な概念「絶対者」(the Absolute)<sup>11</sup>を信じなくなっているばかりではなく、哲学の研究も諦めている (*Letters* 88)。その背景には、イギリスへ来て、友人のコンラッドの紹介で知り合ったアメリカの詩人 Ezra Pound (1885–1972) の影響を受けて、執筆活動に専念するようになったり (“To J. H. Woods,” 10 July 1915, *Letters* 117)、こらからの人生でヴィヴィアンを必要な存在だと感じたりしたこと (“To Henry Ware Eliot, Sr.,” 23 July 1915, *Letters* 119) が考えられよう。彼が学位請求論文を執筆した一因は、両親への義務感によるものである (Brooker 4)。しかしウィナー宛の手紙には、“For me ... philosophy is chiefly literary criticism and conversation about life,…” (88) と書かれているように、彼には、哲学的思考の一端が、今後の人生における文芸批評なのである。後年、彼は文芸批評の活動は自分の詩作の助けとなっていることを述べている (“The Frontiers of Criticism” 106)。この叙述は、彼の哲学的思考が自作の詩の内容に及んでいることを意味する。そこで彼にとって、フラッドリーの「絶対者」という概念は放棄されたが、その概念の基本原理解 (認識者と対象の直接的な結びつき) が、1915年の詩の内容を読者が直接的に把握する表現に生かされているのである。それが、これらの詩の語り手たちの視点なのである。

## 4

第一詩集に収められている最後の3編の詩は“Hysteria” (1915), “Conversation Galante” (1909), “La Figlia Che Piange” (1911)である。これらの詩のテーマは男女間の愛である。そのテーマを考察してみることにする。散文詩の“Hysteria”は次のような文章で始まっている。

As she laughed I was aware of becoming involved in her laughter and being part of it, until her teeth were only accidental stars with a talent for squad-drill. I was drawn in by short gasps, inhaled at each momentary recovery, lost finally in the dark caverns of her throat, bruised by the ripple of unseen muscles. (32)

彼女のヒステリックな笑いが、心身共に自分と一体となるように相手の語り手を挑発する。ついに、彼は訓練された軍隊のような彼女の歯に食い付かれ、気がつく度に深く飲み込まれて、彼女の暗い喉の奥へと引きずられてしまう。

この詩の終わりの文章は次の通りである。

I decided that if the shaking of her breasts could be stopped, some of the fragments of the afternoon might be collected, and I concentrated my attention with careful subtlety to this end. (32)

笑うときに彼女の乳房がそのまま揺れると、語り手は自制を崩壊しかねない。そこで彼は、この日の午後の時間を確保することに集中しようとする。そうしないと、彼自身がヒステリックになって、彼女のペースに巻き込まれかねないからである。

“Hysteria”は、1915年の出版の *Catholic Anthology* に初めて所収されている (Gallup 105)。この著書には、他にエリオットの4編の詩—“The Love Song of J. Alfred Prufrock”, “Portrait of a Lady”, “The Boston Evening Transcript”, “Miss Helen Slingsby”—が含まれている。本稿ですでに考察したように、最初の2編は語り手が社交界の女性への恋心を完全に断念することができなかった内容であり、残りの2編は場末の人々の単調で素朴な生活を描いた内容である。“Hysteria”には、一緒に掲載されたこれら4編の詩と関連した背景が考えられる。それは、都会の男女の不毛の愛と機械的で空虚な生活であろう。

“Conversation Galante”は、語り手と相手の婦人の短い会話から構成されている。第一節で彼が語るの、頭上の月を二人の感傷的な友だちと見なしたり、哀れな旅行者を難儀させる風船と見なしたりすることである。すると、横道にそれる彼の話には戸惑いを感じて、彼女は“‘How you digress!’” (33)とと言う。

第二節では語り手は、自分たちの心の空しさを具体化するために、誰かのピアノによる絶妙の夜想曲で夜や月光を説明する。そのとき、“‘Does this refer to me?’” (33)と返事して、彼女が苛立ちを表す。すると、“‘Oh no, it is I who am inane.’” (33)と彼は即答する。

第三節では、語り手は婦人が自分たちの気まぐれに少しだけのおこぼれを与えると、ユーモアを交えて語る。ついに、彼女は“‘Are we then so serious?’” (33)という言葉で切り返す。

こうした二人の思いのすれ違いの会話から、彼らの間には不毛の愛が認められる。語り手は、精神の不安にさらされないように、わが身の存在を防御した話に終始した姿勢をとっている。

このような語り手の描写には、フランスの詩人 Jules Laforgue (1860-1887) の “Autre complainte de Lord Pierrot” の影響が指摘されている。エリオットがラフォルグの存在を知ったのは、1908年に Arthur Symonds の *The Symbolist Movement in Literature* に所収されている彼の詩を読んでからである。エリオットは、このフランスの詩人が “a *dédoublement* of the personality” を駆使していると考え (“A Commentary” 469)。たとえば、シモンズの著書に引用されている先の “Autre complainte de Lord Pierrot” (Symonds 61; Laforgue 85) では、親しく話しかける女性を語り手のピエロが意地悪く冷笑している。しかし彼の目つきは、この女性が単に話し相手というだけではなく、自分の自問自答の対象でもある。したがって彼は、女性の打ち明け話によって予期される気まずい雰囲気をおそれ、彼女を揶揄しているのである。このように自分を守ろうとするピエロの姿勢が、エリオットの詩の語り手に反映されていると言えよう。

“La Figlia Che Piange”は、表題が嘆く少女という意味なので、語り手が相手に棄てられたこの少女に対

応する過程を描く内容となっている。第一節は、彼が相手から棄てられた少女に、心の痛みを和らげる仕草を助言する。第二節では、彼が少女の恋人に見立てて、彼女と別れる場合の状況を想定する。

第三節は、前節の想定の結果を考えて、語り手が自らの対応を次のように問い直す。

I should have lost a gesture and a pose.  
Sometimes these cogitations still amaze  
The troubled midnight and the noon's repose. (34)

彼は、夜や昼を問わず不安を感じ、“Portrait of a Lady”の青年の場合のように、良心の呵責を噛みしめることであろう。その視点は、男女間の不毛な愛のあり方を示唆することである。しかし、彼は同時に、内省的で自意識過剰で、たえず精神の不安にさらされながら自分の身の置き所を問わなければならない立場に立たされているのである。

1915年の3編の詩は共に、男女間の愛を題材にして、語り手たちが自分の存在を終始気にする姿を描いている。彼らの視点は自らに向きながら、同時に周囲にも注意を払っているのである。

### おわりに

以上の論考の結果を概観してみたい。第一詩集の冒頭の“The Love Song of J. Alfred Prufrock”に登場する語り手ブルーロックは、社交界や場末に視点をおきながら、都会生活の内面の醜い姿を示唆している。1910-11年に脱稿された他の3編の詩における語り手たちの視点は、社交界や場末の姿をさらに詳しくとらえている。1915年に発表された5編の詩は、語り手たちの視点が社交界や場末そのものに注がれている。それは、詩と哲学の間で揺れ動くエリオットの姿が大きく影響している。1909-15年に書かれた3編の詩では、語り手たちの視点は男女間の愛の不毛に向けられている。そこから浮かび上がるのは、終始身の安全を確保しようとする姿勢をとる人間像である。

第一詩集の冒頭から読み進んで1915年の詩の語り手たちの立場に注目すると、この詩集の特徴は、たえず身の置き所を意識しなければならない人間たちの揺れ動く社会像を提示することである。エリオットは20世の前半を不安な時代としてとらえ、詩人の立場を表明していると判断できよう。

### 注

1. 第一詩全集からの引用はすべて *The Complete Poems and Poetry of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
2. 彼の分身についてのさまざまな解釈については、拙著『T. S. エリオットの詩の研究』注 250-51 を参照。
3. エリオットの姉たちは四人いた。もう一人女の子がいたが、彼女は彼の誕生前に死んでいる。
4. この派については次のような解説を参照。

“It [Unitarianism] is essentially drained of its theology, since it denies the central tenets of predestination and damnation; heaven and hell are of less account than the mundane space which we inhabit between them. The measure of Man is Man himself and a peculiarly American optimism, about the progress and perfectibility of humankind, is thereby given a quasi-spiritual sanction.”  
(Ackroyd 17)

5. 家庭では、祖父への背信行為は罪であると教育されている (“American Literature and the American Language” 44)。
6. メンデルの法則については、次のような解説を参照。

「メンデルが1865年に発表し、近代遺伝学の基礎となった遺伝の法則。生物の形質の相違は遺伝因子によって決定され、交雑によって生じた雑種第一代には、優性形質だけが現れ劣性形質は潜在する(優性の法則)、雑種第二代には、優性形質を現すものと劣性形質を現すものが分離してくる(分離の法則)、それぞれの形質が無関係に遺伝する(独立の法則)という三つの法則がある。」(『広辞苑 第

6 版』 2773)

7. たとえば、1904年に彼女は、子供たちが義父を忘れないように願って、彼の回想録である *William Greenleaf Eliot* を出版している。
8. この点については、拙稿「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」を参照。
9. 1915年11月に刊行された *Catholic Anthology* では、“Miss Helen Slingsby” という表題であった (Gallup 105)。
10. この学位請求論文は、*Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley* と改題されて、1964年に出版されている。
11. 完全無欠の存在である「絶対者」の簡潔な解説については、輪島 12-18 を参照。

### 引用文献

- Ackroyd, Peter. *T. S. Eliot: A Life*. New York: Simon and Schuster, 1984.
- Bradley, F. H. *Appearance and Reality: A Metaphysical Essay*. 1893. Oxford: Clarendon P, 1966.
- Brooker, Jewel Spears. “Enlarging Immediate Experience: Bradley and Dante in Eliot’s Aesthetic.” *T. S. Eliot, Dante, and the Idea of Europe*. Ed. Paul Douglass. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing, 2011. 3-13.
- Brooks, Cleanth, and Robert Penn Warren. *Understanding Poetry*. 1938. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1966.
- Cuddy, Lois A. *T. S. Eliot and the Poetics of Evolution: Sub / Versions of Classicism, Culture, and Progress*. Cranbury, NJ: Associated U Presses, 2000.
- Eliot, Charlotte Champe. *William Greenleaf Eliot: Minister, Educator, Philanthropist*. Boston: Houghton Mifflin, 1904.
- Eliot, T. S. “A Commentary.” *Criterion* 12.48 (Apr. 1933) : 468-73.
- . “[A review of ] *Son of Women: The Story of D. H. Lawrence*. By John Middleton Murry.” *Criterion* 10.41 (July 1931) : 768-74.
- . “American Literature and the American Language.” 1953. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber, 1965. 43-60
- . “The Frontiers of Criticism.” 1956. *On Poetry and Poets*. London: Faber and Faber, 1957. 103-18.
- . “The Influence of Landscape upon the Poet.” *Dædalus, Journal of the American Academy of Arts and Sciences* 89.2 (Spring 1960) : 420-22.
- . “T. S. Eliot ... An Interview.” *Grantite Review* 24.3 (1962) : 16-20.
- . *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber, 1964.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- . *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1: 1898-1922*. 1988. Ed. Valerie Eliot and Hugh Haughton. London: Faber and Faber, 2009. 2 vols. 2009.
- Gallup, Donald. *T. S. Eliot: A Bibliography*. London: Faber and Faber, 1969.
- Laforge, Jules. “Autre complainte de Lord Pierrot.” *Poésios complètes*. Ed. de Pascal Pia. Paris: Le Livre de Poche, 1970. 85.
- Levy, William Turner, and Victor Scherle. *Affectionately, T. S. Eliot: The Story of a Friendship, 1947-1965*. Philadelphia: Lippincott, 1968.
- Powel, Harford Willing Hare, Jr. “Notes on the Life of T. S. Eliot, 1888-1910.” Unpublished dissertation Brown U, 1954.
- Pritchett, V. S. “‘Our Mr. Eliot’ Grows Younger.” *New York Times Magazine* (21 Sept. 1958) : 15, 72-73.
- Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell, 1872-1914*. Vol. 1. 1967. London: George Allen and Unwin, 1978. 3 vols. 1967-69.
- Scudder, Clara H. “In Memoriam: Mrs. Henry Ware Eliot.” Scrapbook of Mrs. Henry Eliot, Sr. Harvard

- U Library. Microreproduction Service, Wedener Library, Cambridge.
- Smidt, Kristian. "Dikteren og kritikeren T. S. Eliot 75 år imorgen" ("The Poet and the Critic T. S. Eliot Years Old Tomorrow") *Aftenposten* 422 (25 Sept. 1963): 3.
- Symonds, Arthur. *The Symbolist Movement in Literature*. 1899. New York: E. P. Dutton, 1958.
- Wyant, William K. Jr. "Nobel Winners." *St. Luis Post-Dispatch* 81. 315 (29 Nov. 1959): I-1, I-8.
- 古賀元章. 「T. S. エリオットのエリート論と母親の優生思想」『比較文化研究』54 (2001): 47-55.
- , 『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』. 北九州: 大学出版, 2004.
- 新村 出編. 『広辞苑 第6版』. 1955. 東京: 岩波書店, 2008.
- 米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝. 『優生学と人間社会—生命科学の世界はどこへ向かうのか』. 東京: 講談社, 2000.
- 輪島士郎. 『T. S. エリオットの詩と真実』. 金沢: 高島出版, 1988.